

学生が回答した教育ボランティア活動の意義

－ 山梨大学教育人間科学部附属特別支援学校の場合 －

古屋 義博* ・ 守木 智**

I. 問題と目的

小・中学校や特別支援学校などの学校現場が、教員養成系大学・学部^{*}の学生に提供する教育ボランティア活動がますます盛んになっている。その理由は、教員養成系大学・学部あるいはその学生のニーズと、小・中学校や特別支援学校などの学校現場のニーズの一致にある。

教員養成系大学・学部あるいは学生のニーズについては、例えば、平成18年7月11日の中央教育審議会（答申）「今後の教員養成・免許制度の在り方」には次のように記されている。

また、インターンシップなど学校現場を体験する機会や、学校外における子どもとの触れ合いの機会、現職教員との意見交換の機会等を積極的に提供することが必要である。その場合、これらの活動の機会が、教職課程の全体を通じて、学生の学習状況や成長に応じて効果的に提供されるよう、留意することが必要である。特に、これらの活動が、単なる体験活動に終始しないよう、学生自身による体験活動記録の作成や、それを基にした討論を行うなど、省察的な活動を通して、質の高い学習が行われるよう工夫する必要がある。

(4)「教職指導」の充実－教職課程全体を通じたきめ細かい指導・助言・援助－より

キャンパスの外に出て、学校現場や子どもとの直接的なかかわりに関する体験が、キャンパス内での学びを補強するとの指摘である。教育ボランティア活動の意義の一つであると考えられる。また、文部科学省内に置かれた「教員の資質能力向上に係る当面の改善方策の実施に向けた協力者会議」が平成25年10月15日に発表した「大学院段階の教員養成の改革と充実等について」（報告）には次のように記されている。

教員は初任段階の者であっても学級担任を任されることが多いなど、初任者が負う責務が大きい職業であり、学部における養成段階にあっても、体系的な教育課程によって教員としての基礎・基

* 山梨大学大学院教育支援科学講座

** 山梨大学教育人間科学部附属特別支援学校

本を確実に身に付けさせるとともに、学校現場と大学を結んだ能動的な学修を通じて基礎的な実践的指導力が育成されるべきである。

その上で、学部卒業後教職に就く者について、学校現場において適切な初任者研修等により、教員としての基礎的な資質能力を磨くとともに、学校の新たな課題に応える力量を身に付けさせなければならない。

これら一連のプロセスにおいて、大学が学校教育の課題に即した教員養成を進めるとともに、教育委員会・学校が大学の知見を生かし充実した研修等を行うなど、教育委員会・学校と大学との連携・協働を継続的に推進することが不可欠である。

教員養成系大学・学部の卒業生の多くが学校の教師になる。「初任段階」であろうが、学級担任を任されることが多く、即戦力が求められるとの指摘である。よって、学校現場と大学が連携しながら学生たちに「実践的指導力」を身につけさせたい。これも教育ボランティア活動の意義の一つである。

一方、小・中学校や特別支援学校などの学校現場のニーズについては、例えば、文部科学省初等中等教育局特別支援教育課が平成19年3月に公表した「ボランティア活用事例集」に以下のような事例が紹介されている。

学校現場からは、「一斉指導の中で支援の必要な子どもに丁寧な個別指導を行うなど、子どもの学びを助けてくれている。」「休み時間や給食準備など多くの目が必要な場面で、子どもたちの様子を見てくれ、トラブルになる前の対応ができるようになった。」「子どもにとっては、年の近い相談相手、遊び相手として心の安定を図るのに役立っている。」等の報告があった。

徳島県徳島市の実践例より

本市の公立学校園は、小学校10校、中学校6校、幼稚園7園である。各小・中学校及び幼稚園に対し、以下のような活動及び支援内容を3期の募集期間に分けて提示している。

- | | | |
|-------------|--------------|-----------|
| ①教科学習での支援 | ②運動やスポーツでの支援 | ③音楽活動での支援 |
| ④文化活動での支援 | ⑤学校行事での支援 | ⑥不登校生への支援 |
| ⑦児童・生徒の心の支援 | ⑧福祉教育での支援 | ⑨その他 |

平成18年度の1学期間(夏季休業中も含む)の支援状況においては、授業・放課後学習・夏季休業中の補充学習・水泳指導等を中心に、大阪教育大学からは67名の支援活動学生が活動している。それぞれの内容に、教育的な配慮を要する児童生徒への支援は当然含まれるが、学校側のニーズとして最も高いのは、①の教科学習での支援である。授業への入り込みによる個別指導や校内通級指導教室での学習指導など、各校の実態に応じて学生ボランティアが支援に当たっている。また中学校では、数学などの教科を主にした学習支援を行っているところがある。

大阪府柏原市の実践事例より

この記述のように各学校（その教師）や児童生徒に様々な教育的なニーズがある。それらにきめ細かく対応するために、教員養成系大学・学部の学生が各学校にとって心強い存在になる。これが、教育ボランティア活動を学生に提供する、各学校にとっての意義であると考えられる。

教育ボランティア活動のこのような意義が具現化するか否かは、これをコーディネートする立場にある人々の姿勢に依存している（古屋，2012；古屋，2013）。我々は、その教育ボランティア活動を提供する学校（特別支援学校（知的障害））側のコーディネート役（守木），および、そこに学生を送り出す大学（特別支援学校教諭養成課程）側のコーディネート役（古屋）を担っている。ただ現状、教育ボランティア活動の意義を明確に自覚しないまま、昨年度を踏襲しながら実施される学校行事（以下の枠内に、本研究の対象とした特別支援学校の全校的な行事と、本研究の対象とした学生が行う教育実習の日程を示す）の実施計画にもとづき教育ボランティアの募集要項を例年に従い作成し（守木），その募集要項をいつもの手順で学生に向けて広報する（古屋）というルーチン・ワークに陥っているのではないかと我々は自省している。

（5月頃）	：3年次教育実習：小学校）
5月頃	：運動・レクリエーション的な全校行事
（9月頃）	：3年次教育実習：附属特別支援学校）
10月頃	：文化的な全校行事
翌1月頃	：公開研究会

そこで本研究では、山梨大学教育人間科学部附属特別支援学校（以下、附属特別支援学校）が提供する教育ボランティア活動の、とくに学生にとっての意義について、山梨大学（以下、本学）の特別支援学校教諭養成課程に在籍する学生（4年次生）を対象にした聴きとり調査によって明らかにすることを目的とする。そして、明らかになったさまざまな意義を具現化するための具体的な留意事項を記述したい。

Ⅱ. 方法

1. 対象者

本学の特別支援学校教諭養成課程に在籍する学生のうち、以下の2つの条件を満たした4年次生12人（現員16人）。

○条件1：附属特別支援学校が提供する教育ボランティア活動に、本調査実施の時点で2回以上の参加があった。

○条件2：本研究の目的や手続き、公表の仕方などについての文面および口頭での説明

を理解して、本研究への協力の意思を示した。

2. 期間

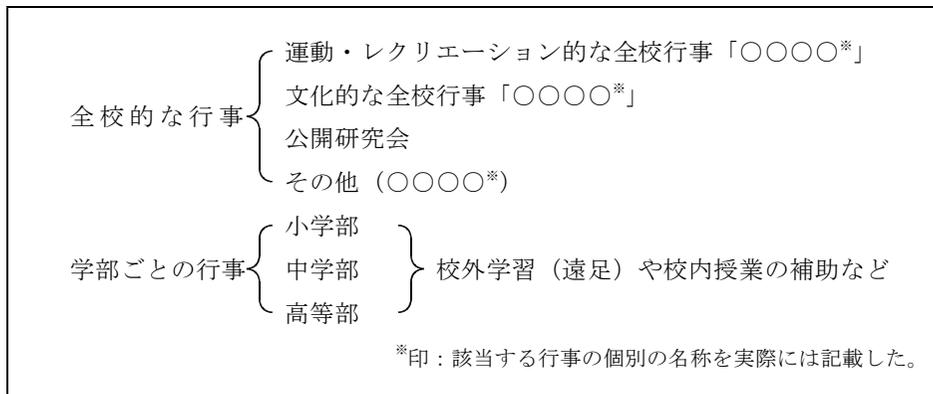
2014年7月15日～28日

3. 手続き

本学の一教室で筆者（古屋）が個別に聴きとり調査を行った。聴きとりの時間は口頭での説明を含めて、1人平均約7分（最小5分，最大9分）であった。教示や記録等の仕方について以下に示す。

(1) 附属特別支援学校が提供する教育ボランティア活動への参加実績の確認

対象の学生が在籍中に提供された教育ボランティア活動の種別（以下の枠内）および、各教育ボランティア活動の個別の名称（行事の名称など）と実施日時を書面で示して、参加実績を確認した。



(2) 参加して最もよかった教育ボランティア活動の確認

「これまでの学生生活で参加した、附属特別支援学校が提供した教育ボランティア活動で、達成感や満足感を最も強く味わえた活動1つだけ挙げてください。」と教示して、選択させた。

(3) 参加してよかったと感じた理由の収集

「達成感や満足感（以下，満足感等と記す）を最も強く味わえた活動として、それを選んだ理由を具体的に教えてください。」と教示して、回答を促した。回答は筆記にてメモをした。回答の区切りごとに筆者がその都度，回答された内容を口頭で繰り返した。すべての回答が終了したところで，一連の回答を口頭で繰り返し，回答の内容を確認した。聴きとり調査の終了後，そのメモを手がかりにして，記録を作成した。録音機器は対象の学

生の心理的な緊張を高めると判断したため、使用しなかった。

Ⅲ. 結果と考察

1. 対象の学生（12人）の教育ボランティア活動への参加状況

附属特別支援学校が提供した教育ボランティア活動への各年次ごとの参加状況（延べ人数）を図1に、対象の学生一人あたりの参加回数を図2に、募集人員が多い全校的行事に関する教育ボランティア活動への対象の学生の参加率を図3に示す。なお、対象の学生は3年次の9月に附属特別支援学校で教育実習を行っている。その関係で、図1については、3年次を教育実習前とその後に区分した。

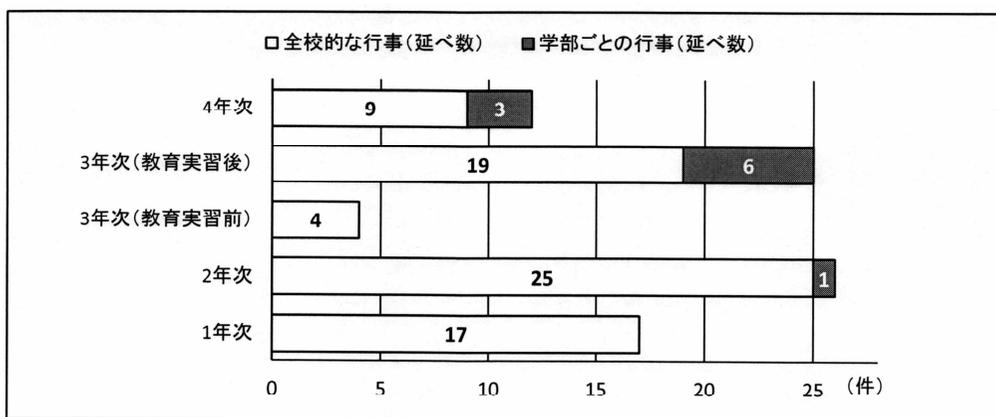


図1 教育ボランティア活動への各年次ごとの参加状況（延べ人数）

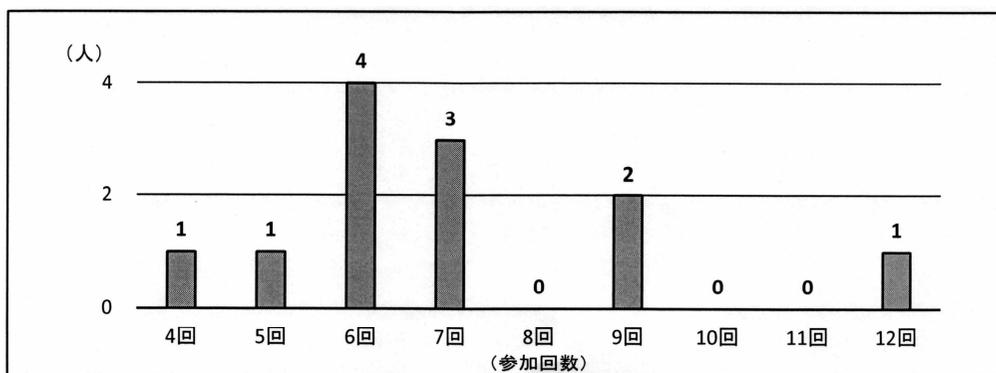


図2 対象の学生（12人）一人あたりの参加回数

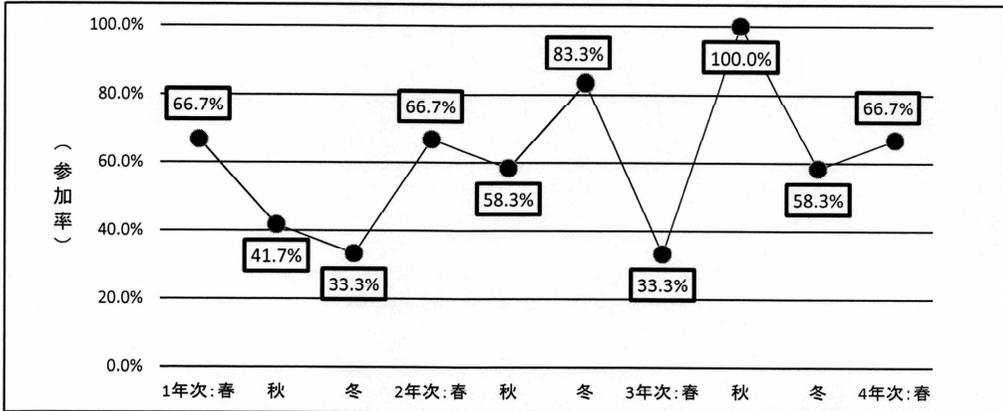


図3 全校的行事に関する教育ボランティア活動への対象の学生（12人）の参加率

教育ボランティア活動への参加状況については、教育実習を境にして、学部ごとの行事への参加が多くなる。全校的な行事に関する教育ボランティア活動について顕著な特徴は認められないが、教育実習直後の活動への参加率は100%になっている。

2. 満足感等を最も強く味わえた教育ボランティア活動とその理由

満足感等を最も強く味わえた教育ボランティア活動として選択されたものを図4に示す。教育実習後の活動を選んだ学生が12人中10人であった。その10人のうち7人は教育実習直後の活動を選んだ。教育実習前の活動を選んだ2人は1年次、最初に参加した教育ボランティア活動を選んだ。

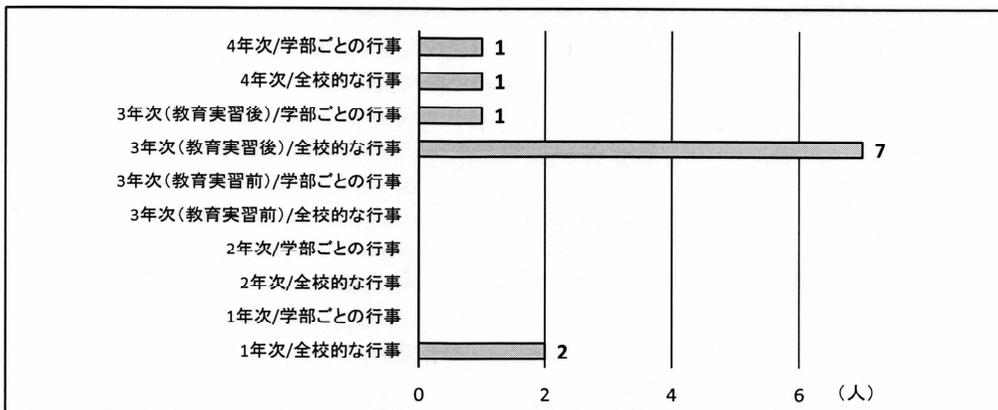


図4 満足感等を最も強く味わえた教育ボランティア活動

後述するが、教育実習後の活動を選んだ10人については附属特別支援学校での教育実習との関連づけた回答（選択）であり、2人については特別支援学校との最初の直接的な出

会という強い好印象による回答（選択）であった。

満足感等を最も強く味わえたという回答した理由について以下、比較的多くの人数を広く募集する全校的な行事という類似した性質の「5月頃：運動・レクリエーション的な全校行事」「10月頃：文化的な全校行事」「翌1月頃：公開研究会」に絞って検討する。

以下に示す学生からの回答（結果）の先頭の記号について説明する。「左」側の数字は、対象の学生12人に割り当てた通し番号（1～12）であり、「右」側の数字は、各学生からなされた複数の回答に割り当てた通し番号である。各行事ごと、そして我々による各分類ごとに各回答（結果）を示し、考察をする。

（1）5月頃：運動・レクリエーション的な全校行事について（1人選択：教育実習後（4年次））

a. 子どもの実態を知る

（4-2）教育実習で出会った子どもたちの成長ぶりを見ることができた（約9か月の時間経過あり）。

教育実習後、つまり4年次での参加についてである。「教育実習で出会った子どもたちの成長ぶり（4-2）」との回答のとおり、時間経過に伴う児童生徒の変化を確認できる機会となっている。

b. 子どもに直接的にかかわる

（4-1）担当する場所、役割は安全確認と遊びの提供、になかなか子どもが遊びに来なかったため、自分がその遊具で遊びながら誘いをかけると、ちらほら子どもたちが集まり、他の子どもたちもそれに誘われて徐々に集まってきた。

（4-3）子どもへのかかわり方、自分の行動について、自分で考えて実行することを体感・実感を伴い学ぶことができた。また、周囲の先生方のやり方も見ながら、自分も工夫することができた。

教育実習後の活動であり、「担当する場所（4-1）」という具体的な役割が与えられ、「自分も工夫することができた（4-3）」と学生自身による児童生徒への直接的なかわりが、学生の満足感等を導いている。

（2）10月頃：文化的な全校行事（7人選択：いずれも教育実習後）

a. 子どもの実態を知る

（3-3）保護者も参加する行事で、保護者と話す機会を得られたり、その話の中から生徒の学校外での様子を聞けたり、生徒とその保護者のやりとりから、その生徒の別の側面を知ることができたりした。

（3-4）教育実習で担当した学部以外の学部の子どもの様子や活動内容を知ることができた。

（5-2）教育実習後の子どもたちの学びの成果を、子どもたちのその具体的な姿を、見ることができ

きてよかった。

- (8-2) 各学部が行う劇発表で、子どもたちががんばっている姿を見ることができた。
- (9-2) 教育実習中に子どもたちが発表の練習をしていて、その後の練習の成果や進歩を見ることができた。

(12-1) 教育実習後の活動で、実習中に担当した授業で取り組んでいたことを生徒たちが生かしている場面を見ることができた。例えば、その授業でねらっていたことが実習中はなかなかうまくいかなかったが、当日はがんばってその生徒なりにやっていた。また、よいところをもっと伸ばした生徒の姿も見た。例えば、リーダー的な役割の生徒が当日、みんなの他の生徒の様子を見ながら、そのリーダーシップをよりよく発揮していた。

これらの回答は教育実習後の参加についてである。「その後の練習の成果や進歩を見ることができた(9-2)」とあるように、時間経過に伴う児童生徒の変化を確認できる機会となっている。「生徒とその保護者のやりとりから、その生徒の別の側面を知ること(3-3)」と児童生徒の実態を別の視点から知る機会にもなっている。

「教育実習で担当した学部以外の学部の子どもの様子や活動内容を知ること(3-4)」という回答があった。教育実習中は配属される学部・学級が固定化される。一方で、教育ボランティア活動では、教育実習で配属された学部・学級以外の児童生徒を知る貴重な機会になる。

b. 子どもに直接的にかかわる

- (3-2) この行事の中のさまざまな活動への生徒の参加にかかわり、担任の先生からの事前の注文があり、その注文通りに生徒の活動を促すことができた。
- (3-1) 教育実習後に参加した行事で、担任した子どもたちと関係もできていて、一緒に、かつ十分な時間、活動を共にできた。
- (5-1) これまでのボランティア活動は運営側で子どもとのかかわりが少なかったが、これについては、教育実習後でもあり、担当の先生から子どもに関する役割と具体的な指示を与えられ、動きやすかった。子どもたちもよりよく活動してくれた。その際、一人の生徒への対応を任せられた。長い時間、一人だけの生徒を担当することは、長短所があるが、より手厚く子どもにかかわれることの意義を感じた。
- (7-1) 教育実習後であったため、先生から生徒のことを任されて活動に参加した。活動中に生徒が不安そうな顔を見せたので、その気持ちが分かり、より適切に手助けしないと、と責任を感じた。この生徒のためにやっているという実感や生徒から頼られていることにうれしさを感じた。
- (9-1) 教育実習後ということもあり、この行事で子どもたちや運営に直接的にかかわれた。例えば、発表部門での待ち時間に、特定の子どものみについて対応した。
- (10-1) 教育実習後の活動で、子どもたちとの関係もできていて、先生方から責任ある役割を与えられ、子どもたちにかかわれた。

(10-3) この学校の一大イベントに一大学生として参加でき、子どもたちを含めた参加者みんなで盛りあがることができた。子どもたち皆がよい表情をしていた。

「これまでのボランティア活動は運営側で子どものかかわりが少なかったが、これについては、教育実習後でもあり、担当の先生から子どもに関する役割と具体的な指示を与えられ、動きやすかった (5-1)」との回答は、教育ボランティア活動への参加の意義が参加の回数や学年進行に伴い変化することを示している。このことから、教育ボランティア活動を提供する側は、学生の学年や参加の回数にふさわしい役割をより意図的・計画的に提供することが求められるといえる。

「担任の先生からの事前の注文 (3-2)」「教育実習後であったため、先生から生徒のことを任されて活動に参加 (7-1)」「先生方から責任ある役割 (10-1)」とあるように、教育ボランティア活動を提供する附属特別支援学校 (の各教諭) が意図的に学生に重要な役割をより具体的に与えることが、学生の満足感等を促すと考えられる。

c. 教育実習の成果を振り返る

(7-2) 教育実習後、久しぶりに生徒に会うのが楽しみであった。会おうと、「あっ、先生だ」と声をかけてくれたり、名前も覚えてくれていて、教育実習でがんばってよかったと思った。

(8-1) 教育実習後のボランティアであり、担当した子どもに会えたことがうれしかった。私の名前も覚えていてくれた。

(9-3) 教育実習中の授業で子どもたちと一緒に仕上げた作品が販売活動の場面でお客さんたちに見せることができ、また子どもたちが実際にそれを売っている姿を見て、自分たちの教育実習中の活動の成果を確認できた。

(10-2) 教育実習中にこの大きな行事に向けて子どもたちと一緒に取り組んだ。行事の当日、その成果を確認することができた。

「自分たちの教育実習中の活動の成果を確認 (9-3)」との回答のとおり、教育実習の成果を振り返る機会になっている。また「教育実習後、久しぶりに生徒に会うのが楽しみ (7-2)」であったとの回答から、よりよい経験が教育実習で学生にもたらされることを前提に、児童生徒とのよりよい再会の機会が提供されることそのものに教育ボランティア活動の一つの意義があると考えられる。

d. その他

(10-4) 学生同士が、学年の枠を超えて、学内や授業以外の場でともに活動できることそのものがよい機会であると思う。

大学内では履修状況の関係で学年単位で活動することが多く、学年の異なる学生同士が活動を共にする機会は少ない。しかし、教育ボランティア活動は「学生同士が、学年の枠を超えて (10-4)」活動できる機会にもなっているとの回答は興味深い。

(3) 翌1月頃：公開研究会（2人選択：いずれも教育実習前（1年次））

a. 学校の現状を知る

(1-1) 駐車場係で、それ以外はフリーで動けたので、先生方の日頃の動き、授業の仕方、実際の指導案やその作り方を知ることができた。さまざまな教材を見ることができ、それを考えたり、工夫してつくったりすることを知ることができた。

(1-4) 研究協議で、他の学校の先生方の意見、例えば授業改善の仕方やその努力の仕方などを聞けたり、熱心に意見交換をする先生方の姿を見ることができ、参考になった。

(11-1) 始めて特別支援学校の授業の実際を見ることができた。

(11-4) 現場の先生たちが参加する授業研究会に出てみて、さまざまな意見、とくに授業を考える視点を知ることができて勉強になった。

「駐車場係で、それ以外はフリーで動けたので、先生方の日頃の動き、授業の仕方、実際の指導案やその作り方を……、さまざまな教材を……、知る(1-1)」機会になったとの回答である。教育ボランティア活動を提供する側の配慮として、学生を行事の重要な運営スタッフと位置づけながらも同時に、学生に学校をより広く知ってもらう機会をより多く提供することが大切といえる。また、「学校の先生方の意見(1-4)」や「授業を考える視点(11-4)」を知る機会にもなり、学生にとっては予定されている教育実習をよりよくすることにつながると考えられる。

b. 子どもの実態を知る

(1-2) 子どもたちが授業に参加する様子を知ることができた。

(11-2) 授業中の生徒たちの様子を見ていて、さまざまな興味をもったり、楽しそうだなと感じたりした。

この2人の回答は、附属特別支援学校の初めての本格的な参観で得た印象である。「授業中の生徒たちの様子を見ていて、さまざまな興味をもったり、楽しそうだなと感じたりした。(11-2)」との印象を学生がもてるような授業づくりが、教育ボランティア活動を提供する附属特別支援学校の教諭に求められるといえる。

c. その他

(1-3) 先輩など知り合いの人、先生たちに会うことができた。

(11-3) 講演会で聞いた話がためになった。

これらの回答のとおり、学生にとっては、さまざまな人や情報に出会えるよりよい機会になっている。

IV. まとめ

各行事ごとあるいは各学年ごとの学生ボランティア活動の意義について、その教育ボランティア活動を提供する学校（特別支援学校）側とそこに学生を送り出す大学（特別支援学校教諭養成課程）側は共通理解することが必要である。学校側はその意義がよりよく具現化するように教育ボランティア活動を計画したい。学生を送り出す大学側は、そのような意義があることを学生に十分に説明をした上で、参加の募集を行いたい。

とくに教育実習前と後で、学生が回答した教育ボランティア活動の意義が大きく異なっていた。

教育実習前については、学部や学級を限定せずに、学校のことをより広く知る機会として捉えたい。我々は学生に対して参加を促す際にも、そして実際に学生が活動する際にも、そのことを念頭に置くことが重要である。とくに学生たちがよりよい第一印象を得られるような慎重な配慮が求められる。例えば、「仕事の合間に学校の様子も見ていってください。」「学校や児童生徒の様子を見て感じたことや疑問などがあれば気軽に声をかけてください。」などの言葉がけが学校側の多くの教師から適宜なされるのがよい。

教育実習後については、学生たちが行う教育実習との関連づけを強調したい。学校側としてできることとして、例えば教育実習の終了時に、「教育実習で担当した児童生徒のその後の様子を今後、ぜひ見に来てください。」などと適宜、言葉をかけることである。また、教育ボランティア活動に参加の意思を示した学生に対しては、学生が重要と感じることのできる役割をより具体的に提供することが大切と考えられる。

付記

本稿は、古屋と守木が協議を重ねながら共同で執筆したものである。

文献

- 1) 中央教育審議会（2006）今後の教員養成・免許制度の在り方（答申）．文部科学省．
- 2) 古屋義博（2012）特別支援教育学生支援員の効果的な活用について．山梨大学教育人間科学部紀要，13，82-91．
- 3) 古屋義博（2013）特別支援教育学生支援員はインクルーシブ教育の促進にどう寄与するのか－小学校に配属された大学生への聴き取り調査から－．山梨障害児教育学研究紀要，7，114-136．
- 4) 教員の資質能力向上に係る当面の改善方策の実施に向けた協力者会議（2013）大学院段階の教員養成の改革と充実等について（報告）．文部科学省．
- 5) 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課（2007）ボランティア活用事例集．文部科学省．